

平成21年度遺跡速報展 後期展  
(発掘調査編)

# いにしへのそとめ'09

あさくらしも きょうでんいせき いまばりしあさくらしも  
朝倉下 経田遺跡(今治市朝倉下)

今治市朝倉下に所在し、今治平野に向かって流れる頓田川の中流域の左岸に位置しています。遺跡の北側が下経田遺跡と隣接しています。

調査では、古墳時代後期(今から約1500~1400年前)の集落が見つかりました。竪穴住居9棟と掘立柱建物2棟が重なり合いながら密集して建てられており、何度も建て替えが行われていたことがわかりました。竪穴住居には壁に沿ってかまどが作られており4本の柱で上屋を支えていました。また、竪穴住居の柱が抜かれた柱穴の中から須恵器が入れられたままの状態で見つかりました。住居を移る際に祭祀などの行為が行われたのかもしれませんが。



古墳時代のかまどをもつ竪穴住居

古墳時代の集落は経田遺跡の北側の下経田遺跡に続いており、今年度も調査を行っています。今年度の下経田遺跡の調査は発掘調査面積が広く、調査範囲全域に住居が見つかり、この経田遺跡の調査の成果と合わせて、古墳時代の集落の広がりや集落内部の様子が明らかになることが期待されます。

あさくらしも しもきょうでんいせき いまばりしあさくらしも  
朝倉下 下経田遺跡(今治市朝倉下)

今治市朝倉下に所在し、今治平野に向かって流れる頓田川の中流域の左岸に位置しています。遺跡の南側が経田遺跡と隣接しています。

調査では、中世(鎌倉時代~室町時代)の集落と弥生時代~古墳時代の集落が見つかりました。中世の集落は平成19年度に行った経田遺跡の調査で、当時の道路が直線的に作られ、周辺に建物が建ち並んだ様子が明らかになっています。下経田遺跡でも集落の続きが広がっていることがわかりました。弥生時代~古墳時代の調査では、集落の中をゆるやかに曲がりながら流れる



自然流路より出土した土器

る自然流路(河川跡)が見つかりました。川幅は約9~10m、深さは約80cmで、調査によって確認された長さは60mを超える規模の大きな河川跡です。この川幅一杯に弥生時代終末から古墳時代初頭頃(今から約1800年前)の土器がたくさん意図的に入れられた状態で出土しており、その数は1000以上に及びます。また、その後、古墳時代後期(今から約1500~1400年前)になって、再び須恵器などの土器が入れられていました。集落の中で使用した土器を川に投げ入れたと考えられます。集落を移る際に祭祀などの行為が行われたのかもしれませんが。

きたいどいせき にじ まつやまし きたいど  
**北井門遺跡 2 次** (松山市北井門)

遺跡は松山平野の南部に流れる重信川と、その支流である内川が合流する河岸段丘の発達した地域に立地しています。周辺では先行して行われた松山外環状線や松山自動車道の建設に伴う発掘調査でも、縄文時代から古墳時代にかけての遺構・遺物が確認されており、付近では大規模な遺跡の存在が注視されてきた場所です。

平成 20 年度 (2008 年) に行われた調査では、縄文時代後期と晩期の土坑、弥生時代後期の竪穴住居や溝、中世の掘立柱建物などが確認されています。縄文時代の遺構は後期末から晩期初頭にかけてのもので、特徴的なものには深鉢を埋納した土坑があります。この遺構は、竪穴に深鉢を直立または横向きに埋納したもので、当時は墓として機能した可能性があります。さらに、出土遺物には結晶片岩製の打製石斧や、香川県で産出されるサヌカイト製の石鏃、大分県姫島産黒曜石製の剥片などが確認され、各地域から石器石材が運ばれてきたことが分かります。弥生時代の住居跡は 7 棟確認され、方形や円形の平面形となるものでした。また、弥生時代の溝からは大量の弥生土器が出土しており、溝内から出土した土器の状況は、当時の祭祀行為を思いうかべることができます。



弥生時代の竪穴住居

きたいどいせき さんじ まつやまし きたいど  
**北井門遺跡 3 次** (松山市北井門)

北井門遺跡は内川によって形成された自然堤防上に位置します。北井門遺跡としては 3 次調査にあたる今回の調査では、主に縄文時代後期～晩期及び弥生時代の竪穴住居・溝・土坑や土器を検出しました。

2 区で検出した縄文時代後期末～晩期前半の竪穴住居は残存状態が良く、該当する時期のものとしては県内随一で、土器も多数出土しています。縄文時代後期末～晩期前半は瀬戸内地域では空白時期と言われており、今後の指標となり得る重要な資料と言えます。



縄文時代後期末から晩期前半の竪穴住居

そのほか、1 区で検出した溝からは、西側から日常的に投棄されたのではないかと見られる弥生時代後期後半の土器が多数出土しています。溝のすぐ東で検出した埋没谷は、遺物の出土状況から縄文時代後期末かそれ以前に形成され、数千年という長い時間をかけて埋まっていったと考えられます。

今回の調査において、少なくとも縄文時代後期からこの地域において人々の生活があったということがわかりましたが、発掘調査は現在も続いています。今後、東に隣接する 1 次調査、現在も続いている 2 次調査の成果と併せて、この北井門地域の集落形成や人々の生活のあり方がより明らかになっていくものと考えられます。

このはなまちいせき まつやましこのはなまち・もちだちょう

**此花町遺跡** (松山市此花町・持田町)

此花町遺跡は松山市此花町および持田町に所在する遺跡です。住宅が並ぶ市街地で、約 400m 南を石手川が流れています。遺跡のうち大半を占めるものは石手川の旧河道ですが、東端では古代末 (約 1000 年前) のものと考えられる竪穴住居が見つかりました。これより西では川が縦横に走った跡が見られ、住居は川を避けるように小高い場所に作られていたものと考えられます。

石手川は江戸時代に足立重信によって現在の河道に固定される前はたびたび洪水を起こす暴れ川でしたが、今回の調査によって、この地域が約千年前には離水し、生活の場として利用可能であったことが分かりました。石手川北側の地形をよく観察すると、北から南へ階段状に低くなっている様子が見られます。これは石手川が南へ移動する過程で作られた河岸段丘で、遺跡より南には段丘がないため、遺跡の存在する段丘が一番新しく作られたものと考えられます。ここより約 400m 北の持田町 3 丁目遺跡では、縄文時代にはすでに人が生活していたことが確認されており、石手川が河道を南へ移動するにつれ段丘面が作られ、松山平野において生活領域が拡大していく状況を読み取ることができます。



1,000 年前の竪穴住居

どうごまちいせき さんじちょうさ まつやましどうごまち

**道後町遺跡 3 次調査** (松山市道後町)

道後町遺跡は、松山市北部に立地する弥生時代から中世にかけての遺跡です。道後町のすぐ東には中世伊予国を支配した河野氏の居城である道後湯築城跡があり、道後町遺跡周辺には、湯築城の城下町が広がっていたと考えられています。今回の調査は平成 10 年度から 12 年度にかけて実施した 1 次・2 次調査に続く 3 次調査となります。今回の調査場所は伊予鉄道後温泉駅の目の前で、調査区の北はアーケード商店街、南東は足湯やからくり時計が設置された放生園で、道後温泉観光の玄関口にあたります。昔この付近は道後鷺谷から流れ出る川と、宮前川との合流地点となっていて、1973 年に埋め立てられるまでは放生池と呼ばれる沼が存在していました。



SD1 (溝) 遺物出土状況

調査範囲は東西 7m、南北 12m 程度のごく狭い範囲ですが、調査の結果、16 世紀後半の土坑 2 基、溝 3 条、柱穴 5 を検出しました。このうち溝は建物に伴う溝と考えられ、土師器杯などとともに天目茶碗が出土しています。天目茶碗はお茶を飲む器で、当時お茶を飲むことができるのは、武士や僧侶など上級階層の人に限定されていましたので、この付近には立派な屋敷が建っていたのではないかと考えられます。池を眺めながらお茶を飲む優雅な風流人が住んでいたのかも知れません。

## 中津倉城跡 (宇和島市高串)

中津倉城跡は旧宇和島市北東部に位置し、高串川と光満川に挟まれ南に延びる丘陵部(標高約90m)に立地しています。平成19年度の調査によって、郭・土塁・堀切などの遺構が検出されており、単郭構造の山城跡であることがわかりました。青磁や備前焼、土師器などの遺物が出土しており、これらの遺物から時期は15世紀前半頃であると考えられます。平成20年度は、主に平成19年度に調査が実施できなかった土塁部分の調査を行いました。



土塁土層断面

調査の結果、土塁の規模は高さ約1.7m、東西約30m(推定)、南北約10m(推定)を測ります。土層は大きく3層に分層でき、I層は表土層、II・III層は盛土層となります。II・IIIの各層は地山である砂岩を含み、また北側をやや高く盛っており、北に隣接している堀切を掘削した際の土砂を盛土として使用したものと考えられます。またIII層は約10~20cmの厚さで黄色と褐色の土を交互に積んでいる状況が確認できました。土塁除去後に土塁下から遺構は確認できず、土塁盛土中からも遺物の出土はありませんでした。

## 岩倉城跡 2次調査 (宇和島市三間町曾根)

岩倉城跡は、宇和島市三間町に所在する中世の山城跡です。平成17年度に実施された1次調査の南西約50mの地点で平成20年10月下旬から12月中旬にかけて2次調査を行いました。調査では、郭・切岸・犬走り・竪穴状建物・溝状遺構・階段状遺構・門跡・土坑・柱穴などの遺構を検出し、陶磁器・備前焼・土師器・水晶などの遺物が出土しました。



調査区完掘状況

検出した郭7面のうち6面は縄張り調査では確認されておらず、発掘調査によって新たに確認されたものです。第28郭は幅約1mと狭く、犬走り(通路)としての機能が考えられます。切岸は高さ約2m、傾斜角約50°となっており、容易に登ることはできません。竪穴状建物(SI1)は、一辺約2.5~2.7mの方形で簡易な小屋(見張り小屋?)と考えられます。時期は出土遺物から15世紀後半頃と推定されます。中世の竪穴状建物は検出例が少なく、愛媛県内では4遺跡目、南予地方では初例です。

今回は、発掘現場を撮影した動画を用意しました。調査区からは三間盆地を一望ことができ、中世山城の雰囲気を感じ取っていただけたと思います。ぜひ、ご覧になってみてください。